

ふれあい

2011年 秋季号 vol.44

2011年(平成23年)11月15日発行

病院 理念

脳神経外科専門病院として私達は患者の皆様にも、より高度の医療技術を提供し、公平で平等な患者中心の医療を行います。

地域の医師不足、医師の高齢化は深刻な問題です。医師不足に合わせ、患者さんが減るわけではなく、逆に医師の負担は増すばかりという現状です。地域医療はもはや医師だけの力では守りきれない厳しい状況にあります。現状を乗り切る具体的な対策として、医師の業務とされている診断書や証明書の作成など事務的業務を代行できる人がいるなら、医師はもっと多くの時間を患者治療に向けることが出来るでしょう。この医師の事務業務の代行を担う新職種として「医師事務作業補助者」が誕生しました。これを受けて、全国組織としての「日本医師事務作業補助研究会」が設立され、本院の医療秘書室主任の矢口智子が初代会長に選出され、不肖私が会の顧問をお引き受けすることになりました。次に、矢口会長の設立表明文を紹介いたします。

「日本の医療を取り巻く環境はさ



病院長
佐藤 秀次

「日本医師事務作業補助研究会」誕生する ～医師の事務作業負担軽減に期待高まる～

さまざまな問題を抱えておりますが、その中でも医師不足による医師の過重労働は、医療の質の低下に直結する解決すべき喫緊の課題であります。

2008年、診療報酬改定に伴い「医師事務作業補助者」という職名が誕生いたしました。医療職が専門性を要する業務に専念し、より効率的な業務運営を行うことが目的であり、特に負担が大きかった医師の事務的業務を補助することに力点をおいております。しかし、医師事務作業補助者の業務として診療報酬に記載されているものはごく僅かであり、どのような仕事をどこまで行うことができるかの解釈が分かれ、未だ業務内容が確立されていないのが現状であります。

このような中で私達は、医師事務作業補助者として実務にあたる当事者間で情報を共有し議論していくことで、医療界に新しい職種を定着させていくことはできないものかと考えました。これまで皆様がアイデアを出し合い試行錯誤して作り上げてきたものは、大勢で共有し、さらに発展させることでキャリアパスの形成に繋がっていくと考えております。

また、医師事務作業補助者を効果的に病院に導入していく過程では、それまで見えなかった病院の問題点が浮かび上がってきます。医師事務

作業補助者は、専門職と専門職の間、または専門職と患者の間に入って仕事をしなければならぬからです。これらの問題をひとつひとつ解決していくことは、勤務医の負担軽減はもちろん、病院の改革にも繋がることでしょう。

私達の使命は、勤務医の負担を軽減することにより、安定的かつ継続的な医療提供体制を整えることです。医療崩壊という国民の生活基盤を揺るがす深刻な事態に進みつつある今こそ、この会を通し医師事務作業補助者の団結を図り、問題に真剣に取り組んでいきましょう。」

今後、県内はもとより全国の医師事務作業補助者の育成と研究会の発展に微力を尽くして参る所存です。で、関係者各位のご理解とご協力をお願いいたします。

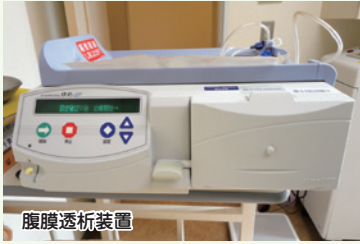
野々市町から野々市市へ

11月11日に当院が所在する「石川県野々市町」が市制施行されて「野々市市」になりました。



当院の住所もこれまでの「石川県石川県野々市町郷町262-2」から「石川県野々市市郷町262-2」へ変わります。





今回ご紹介する「にしかわクリニック」は、辰口橋や川北大橋のすぐ近く能美市三ツ屋(旧辰口町)にあります。院長の西川忠之先生は、富山医科大学卒業後、金沢大学附属病院、石川県立中央病院、芳珠記念病院等のご勤務を経て、平成14年5月に現在の地に、

「自分の力で開業のきっかけは、地域に根ざした在宅医療をやりたい」との強い思いから。透析は、血液透析と腹膜透析に分かれます。血液透析は、人工透析のことで、透析室で行われます。腹膜透析は、自分の腹膜を利用して行う透析で、自宅で行えます。先生は、血液透析と腹膜透析の両方に対応しています。また、在宅医療では、医師と介護士の両方が重要です。先生は、在宅医療の経験が豊富で、在宅医療の専門家として活躍しています。

クリニック全体が “地域のかかりつけ医”として

医療法人社団 泉之杉会 にしかわクリニック



院長：西川 忠之 先生

どこまでできるか挑戦したいという気持ちで段々と高まってきた。」と笑顔で話される姿からは先生の在宅医療に対する熱い思いが伝わってきます。

また在宅医療では医療と介護の両面から総合的に判断し治療することが重要であるとお考えから、居宅介護支援事業所と訪問介護ステーションも併設しております。取材当日先生といっしょに、素敵な笑顔で対応してくださった看護師長の中出さんは、看護師でありながらもケアマネージャーの資格も有しておられます。

先生のご専門は泌尿器科と透析治療。先生のクリニックでは、一般的な血液透析を行える設備もありますが、「腹膜透析」と呼ばれる透析治療にも取り組んでおられます。腹膜透析は自

宅で行うので血液透析に比べ通院回数も少なく、働いている方や、通院が困難な高齢者の方にとっては、有効な治療法だと先生はおっしゃいます。普段クリニックでは泌尿器科と内科を中心に診療されていますが、中には専門外の病気を持つ方でも、他の病院への通院が困難で、先生のクリニックへの通院や訪問診療を希望される方もおられるそうです。そんなとき、先生のクリニックでは、その求めに快く応じるだけではなく、クリニックの職員全員で、その病気に関する勉強会を行い、その患者さんに対し最善を尽くせるよう努めているそうです。ちょうど私たちがお邪魔した日も、勉強会をやっておられました。「勉強会は月に1、2回いろ



透析室

DATA

医療法人社団 泉之杉会

にしかわクリニック

住所

石川県能美市三ツ屋町イ14番1号

TEL

0761-52-0025



院長：西川 忠之 先生
経歴：富山医科大学医学部卒業
医学博士(金沢大学医学部)
(社)日本泌尿器科学会専門医
(社)日本泌尿器科学会指導医
(社)日本透析医学会認定医
学会活動：日本泌尿器科学会、日本透析医学会、日本腎臓病学会、感染症学会、性感染症学会会員

いろいろなテーマで行っています。例えば、薬一つにしても、医師だけがわかっているのではなく、みんなの知識を共有する。こういった院内における知識の共有や連携、つまりは「チーム医療」がもっとも大切なことだと思っています。」と先生はおっしゃいます。まさにクリニック全体が「地域のかかりつけ医」としての熱意と使命感を持って、地域医療に望んでいる姿を垣間見たような気がしました。

(文責：川腰)

腰椎すべり症の症状は？

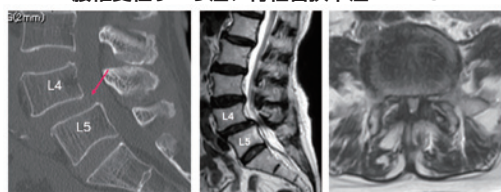
病院長 佐藤 秀次



腰椎すべり症とはその言葉が示す通りに腰椎の骨と骨の並びが乱れずれる病気です。下の骨に対して上の骨が前にずれる前方すべり症が多いですが、後ろにずれる後方すべり症や横にずれる側方すべり症もあります。骨と骨との間には生理的に許容される範囲の動きは誰にでもあり、そのために柔軟な腰の動きができるのです。しかし、骨と骨とがずれることは、明らかに非生理的、病的なことなのです。骨同士がずれる状態があると、先ず起こる症状は腰痛です。坐位から立ち上がる時や腰をかがめた状態から伸ばす時などに腰の伸びきらない痛みが発現すると訴える方が多いようです。次第に一定の姿勢を保つこともつらくなってきました。このようにすべり症の初期の症状は腰痛なのです。この腰痛の時期が比較的長く続きます。途中、ぎっくり腰を起こす人もおられます。骨がずれて、そこが病的に動いていると、長い年月の間にそのずれた骨の部位に狭窄症が発生します。狭窄症とは、通常はすべり症を伴わないものを言いますが、すべり症が基になって狭窄症が発生することもあるのです。この狭窄症はすべりの進行と加齢に伴う椎間板の膨隆や靱帯の肥厚などによって進行しま

す。そして、ある時から腰の痛みばかりでなく、お尻や大腿・下腿に痛みやしびれを感じるようになります。そして、立位の保持や歩行に障害がでてきます。これらの症状はすべり症を基に脊柱管狭窄症が進行し、骨の中の神経の圧迫が強くなったことを示すものです。中には、ぎっくり腰から椎間板ヘルニアを合併して下肢に激痛の起こる人もおられます。これらすべり症の症状も改善と悪化を繰り返しながら、加齢とともに次第に悪化していくのが普通です。立ち仕事、長歩きが益々できなくなっていく腰の病気で、この病気は女性に多く、40～50代頃から本格的に患者さんをお悩ませています。次回は、治療について説明いたします。

腰椎変性すべり症、脊柱管狭窄症 L4/5



腰椎の4番(L4)と5番(L5)の間ですべり症を認め、脊柱管が高度に狭窄している。

院外活動

7/16

第14回病院脳神経外科学会にて当院の6病棟のチームが、ケアの質向上を目的とする発表を行いました。

9/3

平成23年度救急フェアが開催され、山本副院長が脳卒中相談を担当しました。

9/24

北国新聞朝刊「舞台」に佐藤病院長の「最新の腰椎手術」というコラムが掲載されました。

9/25

小松市の不動島町公民館で『耳寄りな講演会』が開かれました。山本副院長が「あなたの脳は大丈夫ですか」という演題で講演しました。

9/28

白山野々市認知症勉強会が開催され、佐藤病院長が座長を務めました。

10/21

「これからの地域での認知症治療を考える会」で佐藤病院長が「アルツハイマー型認知症治療における新たな薬物療法」と題して特別講演を行いました。

10/22

山本副院長が白山のいち医師会公開講演会「病息災無病息災」で「脳卒中はコワイ!!」という講演を行いました。

10/24

当院で「加賀脳卒中地域連携パス回復期分科会」が開かれました。回復期の医療機関の方々と当院職員が参加し、加賀パスの概要説明や回復期分科会検討事項などが話し合われました。

10/26

白山市民交流センターで『耳寄りな講演会』を開催しました。山本副院長が「あなたの脳は健康ですか」という演題で講演しました。



作業療法士による取り組み

リハビリセンター 作業療法士 河野ちひろ

現在、当院には回復期リハビリテーション病棟が2病棟あり、18名の作業療法士が勤務しており、患者さんと自宅退院に向けて積極的に取り組んでいます。

当院の作業療法では、退院後に患者さん一人一人がその方らしい生活を送れるような練習を行っている。退院後の生活を送る上で基本的な動作となるトイレ動作・入浴動作・食事動作練習などの日常生活活動へは、学習理論を用い、課題分析や強化刺激などの利用、また代償手段や環境設定を含め、患者さんに合った練習を取り入れることでより早く自立できるように練習を行っています。それだけでなく、元気に生活してもらうため、その方がそれまで行っていた事に焦点をあてます。ある方の練習として野菜栽培、ある人には調理や掃除動作などの家事動作練習を提供しています。その一つの外出練習では実際に喫茶店やその他の公共施設へ患者さんと行き、評価や練習を行っています。

その他、患者さんのご家族の中

には、夜間の介護へ不安を抱えている方もいらっしゃると思います。このようなご家族の方には、回復期病棟にある宿泊体験室の利用が可能です。ここには、実際の家のようなキッチン、居間、浴室、トイレがあり、退院後の生活をイメージしやすいように患者さんと一緒にご家族の方も宿泊することができます。

作業療法室はいつも明るい雰囲気、患者さんとスタッフが楽しみながら練習を行っています。一人でも多くの患者さんが退院後に笑顔で生活を送れるように、スタッフ一人一人が努力していきます。



部署探訪

3 医療情報部

当院には多くの医療情報システムが稼働しています。各部門の業務をサポートする部門システム、オーダーリングシステム、電子カルテシステムや院内LANシステムなど、患者さんの治療を支える情報基盤として重要な役割を担っています。

それだけに万が一、トラブルでシステムが停止してしまうと、診断や迅速な治療を提供できなくなりま

す。また、システムトラブルは診療のみならず、病院内の業務に多大な影響をおよぼす恐れがあります。医療情報システムは、まさに病院業務全般の「神経組織」なのです。そのため



にも、24時間365日止まらない、堅牢なシステム体制を課題に日々努力しております。

医療情報部は、部長に竹内脳神経外科部長、副部長に本間検査部技師長、システム管理係として楠、横山の計4名で構成されています。

主な業務内容は、

- ・電子カルテおよびオーダーリングシステムの管理
- ・部門システムの管理補助
- ・各種システムの導入にあたっての支援
- ・システムトラブル、ハードトラブル時の対応
- ・院内LANシステムの管理、保守などです。

医療の質的向上を目指し、職員が使いやすいシステムの構築・管理をモットーにがんばっています。



TOPIC

しんきんビジネスフェア北陸 ビジネス街道2011

10月20日、石川県産業展示館3・4号館で「しんきんビジネスフェア北陸ビジネス街道2011」が開催されました。当院も3号館でブースを出展し、石川県内外の企業や関係者など多くの方が来場されました。血圧や体脂肪、末梢神経の血流、骨密度測定は常時満席になるほどの大盛況でした。また、最近の健康

ブームを象徴するように来場者からは、脳ドックや脊椎手術に関する質問が多く寄せられました。

